

スポーツが惹きつけるもの

(「平成 29 年度 島根県高体連誌」巻頭言・一部改)

島根県高等学校体育連盟
会長 高橋泰幸

(冒頭略)

高体連の仕事をさせていただいたお陰で、これまでの教員生活の中で最も多く、様々な高校生スポーツに接する機会に恵まれた 1 年でした。と同時に、心奪われる場面を数多く目の当たりにした 1 年でもありました。

おそらく、人は誰も一度は何らかのスポーツに、プレーヤーとしてまたは観客として、心奪われた経験があると思います。そして、人それぞれに、勝ち負けとは別の次元で「心惹かれる場面」や「お気に入りのシーン」があるのではないかと思うのです。

たとえば、テニスのサーブが打たれる前の静けさ。バスケットボールやハンドボールで得点に結びつく鮮やかなパスが通った瞬間。決まりそうで決まらず延々と続くバレーボールのラリー。選手と応援席がともに固唾をのむサッカーの PK 戦やホッケーのペナルティコーナー。あるいは、“プレーヤーの肩間のシワが好き”とか、“駅伝中継から聞こえる足音がたまらない”とか、いささかマニアックな魅力にハマった人もいるかも知れません。

ちなみに私の好きなシーンはと言うと、白熱のラリーが続く卓球やバドミントンで、ネットイン得点した選手が「(すまん)」と片手を上げ、相手も「(了解)」と軽く頷く場面。また、バスケットやサッカーで選手同士が激突・転倒したとき、ぶつかった選手が手を差し伸べ、倒された選手がその手を借り、敵味方の手と手が交わされるシーン。

何の競技であれ、本気の練習は厳しく辛いものです。だからこそ勝たなければ意味がない、練習を無駄にしたいくないという思いが募ります。ですから、対戦相手に敵対心を抱くのは当然のことですし、ましてや試合中に衝突・転倒したりすれば、敵意がむき出しになるのもある意味自然のことでしょう。

しかし、その気持ちをぐっと抑えて、手を差し伸べ、手を借りる。それはポーズだ、綺麗事だと言う人もいるかも知れません。でも私には、この時つながれた二つの手が、スポーツマンならではの高潔な精神の証のように感じられるのです。

ルールブックに「転倒した選手を引き起こす」などと規定する競技はありません。このシーンは、ルールという枠を越えた人間性を伝えてくれます。

スポーツに惹きつけられる瞬間の一つです。

来るべき平成 30 年度も、選手・部員の皆さんだけでなく、応援に駆けつけてくれた友人や保護者、関係者の方々、そしてすべての観客を惹きつけてやまないシーンや瞬間が、次々現れてくることを楽しみにしています。